

(財)日本植物調節剤研究協会 創立二十五周年記念行事を催す

〈(財)日本植物調節剤研究協会 事務局〉

客年は当協会が昭和39年11月12日に設立されてから25周年に当たる。そこでこれを記念して、平成元年12月13日に池之端文化センターで記念式典と記念祝賀会が約550人の参加の下で盛会裡に行われた。

1. 記念式典

記念式典は17時より次の式次第で行われた。

- (1) 開会の辞 吉田孝二常務理事
- (2) 会長式辞 吉沢長人会長
- (3) 来賓祝辞
 - (ア) 農林水産省農蚕園芸局長 松山光治氏
 - (イ) 農薬工業会会長 小平 祐氏
- (4) 植物調節剤開発利用普及功労者表彰
 - (ア) 選考経過報告
 - 表彰審査委員長 戸蒔義次氏
 - (イ) 表 彰
 - (ウ) 受賞者謝辞 井上利志栄氏
- (5) 祝電披露
- (6) 閉会の辞

記念式典は当協会の則武晃二事務局長の進行によって進められた。

会長式辞では、当協会が設立25周年を迎え、植物調節剤の利用開発とその推進に重要な役割を果たすまでに発展したこと、植物調節剤の果たす役割は「低コスト農業の確立」にあり、そのためには環境に対する安全性の確保への諸施

策の推進、効力持続型除草剤の開発、薬剤の低価格化が重要であることなどが述べられた。また、設立25周年を記念して、除草剤・生育調節剤の開発利用・研究・普及に永年にわたって献身的な努力を払ってこられた方々の労に報いるため功労者表彰をさせていただくことにした趣旨が述べられた。

続いて、農林水産省の松山農蚕園芸局長と農薬工業会の小平会長から祝辞が述べられた。松山農蚕園芸局長は、今後とも農業生産のコスト低減を図るために一層効率的かつ低廉な植物調節剤の開発、合理的な流通方法の検討、安全性の高い剤の開発や剤形改良が重要であり、当協会の努力と協力が不可欠であることなどを述べられた。小平農薬工業会会長は、農薬業界は今4,000億円市場を踏まえるに至り大きな曲り角に立ち、この事態を乗り切るためには業界



記念式典における吉沢会長式辞

の一致協力が不可欠であり、この面で当協会の果たすべき役割の大きいことなどを述べられた。

引き続き功労者表彰が行われ、戸荊表彰審査委員長から功労者選考経過が報告された。この中で、表彰規程に基づいて国立関係試験研究機関の長、都道府県各主務部長及び各評議員に推薦を依頼し、11月17日に開催された表彰審査委員会で慎重な審査が行われ、25年以上の経歴をもち特に顕著な功績のある特別功労者88名、10年以上の経歴をもち顕著な功績をあげた功労者279名、この事業に貢献した薬剤21剤、計367名、21薬剤が選考されたことが述べられた。

表彰状の授与は部門ごとに行われた。進行者が受賞者名を読みあげ、次の方々が各部門の代表として表彰状と記念品を吉沢会長から受けた。特別功労者（農林水産省関係6名、都道府県関係35名、会社関係36名、大学団体関係11名、計88名：（財）日本植物調節剤研究協会 井上利志栄氏、研究部門功労者（農林水産省関係9名、都道府県関係79名、団体関係17名、計105名）：栃木県農業試験場 栃木喜八郎氏、普及部門功労者（都道府県関係33名）：新潟県農林水産部 片山雄治氏、開発普及部門功労者（会社関係141名）：塩野義製薬㈱ 林 幸之氏、薬剤部門（除草剤18剤、生育調節剤3剤、計21剤）：

クサカリン粒剤 三共㈱ 石田三雄氏

表彰式に続いて、全受賞者を代表して井上利志栄氏から光栄ある功労者表彰に浴して一層精進することを念じている旨の謝辞が述べられた。

その後、進行者から祝電が披露された。祝電は農業研究センター所長、野菜試験場長、植物防疫全国協議会長、（社）日本植物防疫協会理事長、クミアイ化学工業（株）社長、三共（株）社長、山田登氏（前熱帯農業研究センター所長）ほか多数の方からいただいたことが報告された。

吉田常務理事の閉会の辞で協会設立25周年を記念して催された式典は幕を閉じた。

2. 記念祝賀会

記念祝賀会は18時より次のように行われた。

- (1) 開会の辞 吉田孝二常務理事
- (2) 会長挨拶 吉沢長人会長
- (3) 来賓祝辞

農林水産省農林水産技術会議事務局長

（代理）吉村龍助研究総務官

- (4) 乾 杯
- (5) 祝 宴
- (6) 万歳三唱
- (7) 閉会の辞



植物調節剤開発利用普及功労者表彰



功労者表彰を受けられた方々

吉沢会長挨拶、吉村研究総務官の祝辞があった後、戸蒔義次氏の音頭で乾杯が行われ、祝宴に移った。

往時斯界で活躍され久しぶりにお顔を見せた招待客もおられた。三々五々に群れて話がはずみ、なごやかに祝宴が進んだ。

最後に当協合理事 八洲化学工業(株) 小島雄次氏の音頭で斯界の一層の発展を祈念して万歳三唱がなされ、当協会設立25周年記念祝賀会の宴は閉じられた。



記念祝賀会における乾杯（戸蒔義次氏）

会長式辞

本日は、お寒いところを遠路当協会の創立25周年記念式典に農林水産省の松山農蚕園芸局長さん、農林水産技術会議事務局吉村研究総務官さんをはじめ、国立試験場、都道府県関係者、また会社関係者の多数の方々のご出席下さいましたことを心より厚く御礼申し上げます。

当協会は、昭和39年11月12日に、植物調節剤の開発利用の推進とその成果の普及を通じて、農林業の近代化と生産性の向上を図ることを目的として設立されました。爾来25年が経ち、その間に幾多の紆余屈折がありましたが、その都度農林水産省を初め、関係各位の適切な指導によって大過なく、今日このように25周年を迎えることができましたことは誠に感謝に堪えないところであります。重ねて厚く御礼申し上げます。

おかげさまで、今日では植物調節剤の利用開発とその推進については、斯道で重要な役割を果たすまでに発展致しましたことを喜ぶと同時に、これからも斯界の発展に大きな責任のあることを痛感する次第であります。

今日の日本農業をとりまく環境は厳しく、また幾多の難問が累積致しておりますことは皆様もよくご承知のことと存じます。このような情勢の中にあって、農林水産省が先に上げておられる「低コスト農業の確立」は当協会にとって最も関心の深いものであります。元来、植物調節剤は農業の生産性向上、特に除草剤は除草労力の軽減による労働生産性の向上と共に、四つん這いの手取り除草作業を立ち作業に変えるという目標を持っておりました。それが、水田10アール当たりの除草労力はかつては50.6時間と多かったものが、今日では3.5時間と1/14に省力化したこと、また、四つん這いの作業を除草剤散布という楽な立ち作業に変えるという極めて大きい功績を残して参りました。

これからも、植物調節剤の果たす役割は「低コスト農業の確立」であります。そのためには、環境に対する安全性の確保への諸施策の推進、効力持続型除草剤の開発、また薬剤の低価格化が重要であると考えます。これらの問題の解決に当たって関係各位の一層のご指導とご協力をお願いする次第であります。

さて、本日は当協会の設立25周年記念式典を挙行するに当たり、これまで除草剤および生育調節剤の開発利用、研究、普及に永年にわたって献身的な努力を払ってこられた方々の御苦労に報いるため、その功労者表彰をさせて頂くことにしております。受賞者各位のたゆまぬご努力に対し心より感謝の意を表する次第であります。

最後に、この25周年を契機として、植物調節剤の開発利用普及をさらに推進し、我が国の農業の近代化に貢献するべく、役職員一同一丸となって一層努力し、来るべき30周年にもますます発展することを祈念して式辞と致します。

皆さん大変有り難うございました。

平成元年12月13日

財団法人 日本植物調節剤研究協会 会長 吉沢 長 人

農 蚕 園 芸 局 長 祝 辞

本日ここに、日本植物調節剤研究協会創立25周年記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝の言葉を申し上げます。

はじめに貴協会が、昭和39年の設立以来、25年の長きにわたり、関係者の皆様方の御協力を得つつ、植物調節剤の開発・普及を推進し、農業生産力の飛躍的向上、農業労働における時間短縮及び負担軽減等、我が国農業の発展に多大な貢献を果たしてこられたことに深く敬意を表する次第であります。

御承知のとおり、我が国農業は、国民生活にとって最も基礎的な物資である食料を安定供給するという重大な使命を担っているほか、活力ある健全な地域の維持、国土・自然環境の保全など、我が国経済社会の発展と国民生活の安定を図る上で重要な役割を果たしているところであります。

しかしながら今日の我が国の農業・農村を取り巻く情勢をみますと、土地利用型農業部門における生産性向上の立ち遅れ、食糧消費の伸び悩み及びそれに伴う農産物需給の不均衡、労働力の高齢化、兼業化の進展に伴う農村社会の活力の低下といった問題に直面しており、また、農産物の内外価格差の是正、農業保護の在り方等について内外から強い関心が寄せられているなど、誠に厳しい状況にあります。

農林水産省といたしましては、このような現状に堪がみ、今後の農政を推進するに当たっては、農業の持つ基本的かつ多面的な役割を踏まえつつ、今後の社会経済情勢の変化に的確に対応していくため、各般の施策を強力に推進していくことが重要であると考えております。なかでも、農業、肥料、農業機械等の農業生産資材費の節減は重要な課題の一つであり、植物調節剤についても、その生産、供給、流通及び利用の各段階にわたる合理化が必要となっているところであります。今後とも、農業生産のコスト低減を図るため、より効果的かつ低廉な植物調節剤の開発、合理的な流通方法の検討を進めることが重要であると考えております。

また、食品の安全性や環境汚染について社会的関心が非常に高まってきており、より安全性の高い植物調節剤の開発や剤型の改良を進めることも重要であります。

これらの諸施策が所期の成果を挙げるためには、日本植物調節剤研究協会を中心とする関係各位の御努力、御協力が不可欠であり、このような中であって、日本植物調節剤研究協会創立25周年記念式典が挙行されることは、誠に意義深いものとする次第であります。

この25周年を契機として、貴協会が益々発展し、我が国農業・農村の発展に向けて大きな力となられますことを祈念いたしまして、私の祝辞にかえさせていただきます。

平成元年12月13日

農林水産省農蚕園芸局長 松 山 光 治

農 薬 工 業 会 長 祝 辞

本日、日本植物調節剤研究協会25周年記念式典が盛大に挙行され、真におめでとうございました。ここにお揃いの農業関係の諸賢と共に、盛儀をお喜び申し上げます。又、晴れの表彰を受けられる皆様には、多年の御苦労が報いられ、心より御祝い申し上げます。

日本植物調節剤研究協会は昭和39年に設立されました。丁度東京オリンピックが開催され、日本全体が飛躍しようとしている時でした。当時、農業業界も高成長中でありましたが、同時に農業取締法の大改正が打ち出され、大きな曲り角にありました。

日本植物調節剤研究協会は、その難しい時代の要請を担って設立され、その後よく新しい農業の開発に努力され、業界の発展に貢献されました。そして当時の農業出荷額が年500億円であったものを現在の年4,000億円と8倍のスケールに成長させた原動力となりました。

この農業の進歩、発展は日本の農業の生産性を飛躍的に向上させ、日本の高度工業化を促して、世界の大国に築き上げた大きな要因となりました。この間、よく技術革新を進め、効率的で、安全性の高い新剤の開発を促進された協会の皆様の献身的な御努力に心より敬意を表する次第であります。

さて、協会25年の歴史を経て、4,000億円市場を踏まえるに至った農業業界も、ここに再び大きな曲り角を迎えております。安全性問題は難しくなり、コストは上がり、パイは小さくなってきました。一企業、一組織で対処するには余りに困難な情勢にあります。今こそ、産・官・学が一体となって力を尽す時だと思います。

先般、当機関誌「植調」に拙文、「農業外部不経済の時代」を載せて頂きました。私の申し上げたかったことは、「農業の量的拡大は終わった。質的成長の時代に力を合わせよう。逆境は不幸ではない。協力から幸福が生れる。」ということでした。

今、この高い席から産・官・学各界のトップの皆様のお顔を拝見しますと、あの拙文は冷汗ものですが、意とする所をお察し頂ければ幸いです。どうか諸賢の御力添えで、農業業界の新しい繁栄の道が開かれますよう祈念する次第です。

25周年は人であれば銀婚式で、更に実りのある人生を築く節目です。日本植物調節剤研究協会が更に充実した成果を挙げられる様、衷心より念願致します。

本日の御盛儀、真におめでとうございました。

平成元年12月13日

農薬工業会 会長 小 平 祐